

豊明希望チャペル礼拝

2025/10/12

「イエス・キリストはすべての人の主」

ルカの福音書 3：1～20

「3:1 皇帝ティベリウスの治世の第十五年、ポンティオ・ピラトがユダヤの総督であり、ヘロデがガリラヤの領主、その兄弟ピリポがイトラヤとトラコニテ地方の領主、リサニアがアビレネの領主、3:2 アンナスとカヤパが大祭司であったころ、神のことばが、荒野でザカリヤの子ヨハネに臨んだ。」

今日の最初の聖句です。今日の箇所は、バプテスマのヨハネの記事です。

ルカは、ここまでがそうであったように、歴史の公の記録を、なるべく正確に記します。皇帝ティベリウスの 15 年。ということは、西暦 25 年ということになります。この時にイエス様が洗礼をうけられ、公生涯を始められたとすれば、伝統的にその年が 30 歳の時とすれば、イエス様は、紀元前 5 年に生まれたこととなります。そうすると、イエス様が生まれた年を西暦元年とするわけですから、今年は、2030 年となるわけです・・・西暦を直さなくてはなりませんね・・・もちろん西暦は聖書が決めたことではありませんから、いずれにしても、イエス様が、現実、事実としてこの世に来て下さって、救いをなして下さったとルカは、そこを強調していると思います。聖書、ここに書かれていることは、空想話でも作り話でもないということです。



前回の 2 章は、イエス様の成人を祝う、宮詣(みやもうで)の記事でしたが、1 章でルカは、イエス・キリストを証言する最後の預言者となった、そして直接的にイエス様を、この方こそ神であり、メシヤ(救い主)ですと、全人類に紹介する役割を与えられた、いわゆるバプテスマのヨハネの誕生を、すでに語りました(1:5～25)。

いよいよ、そのヨハネがイエス様をお迎えして、洗礼を受ける箇所です。最初に、内容を、ザッと見ます。ちなみに、他の福音書に比べると、ルカは、微妙に、ヨハネがイエス様にバプテスマを授けたことのエピソードをずいぶんと、省略しています(マタイなどの、イエス様とのやりとりの場面は省かれている)。

そのことよりも、ルカの目は、イエス様をお迎えするために、私たちのすべきこと、私たちがいかに罪深く、イエス・キリストをお迎えするにふさわしい者でないかを、迎えに来た群衆への説教で、強調します。3:3～14 に、それが 있습니다。

この箇所の代法的な聖句を確認します。

「3:7 ヨハネは、彼からバプテスマを受けようとして出て来た群衆に言った。「まむしの子孫たち。だれが、迫り来る怒りを逃れるようにと教えたのか。3:8 それなら、悔い改めにふさわしい実を結びなさい。『われわれの父はアブラハムだ』という考えを起こしてはいけません。言っておきますが、神はこれらの石ころからでも、アブラハムの子らを起こすことができるのです。」

ユダヤ人だから、神の民だからとの自負は結構だが、前回のローマ人への手紙でも、パウロが言ったように、ユダヤ人だ、アブラハムの子孫だということは、アブラハムの子孫らしく歩むことによってこそそのことであって、悔い改めのない生活では、意味がないというのです。

「実を結びなさい。『われわれの父はアブラハムだ』」などということは、何の意味もない。「言っておきますが、神はこれらの石ころからでも、アブラハムの子らを起こすことができるのです。」と、神の民とされたのは、神の一方的な恵みであって、恵みなくしては、私たちは、そこらの石ころに過ぎない存在だと言うのです。すなわち、恵み、イエス・キリストの罪の赦し、贖いこそが必要だと言っているのです。だから、悔い改めて、真っ白な心になって、イエス・キリストを迎えよ、イエス・キリストをまてと言うのです。

15 節からは、3:15～17 で、ヨハネは、自分の役割が何であることを明確にします。ヨハネは、そういう意味で、限られた役割、すなわち、究極の救いを与えるイエス・キリストの、露(つい)払い、イントロダクションにしかすぎないことを強調します。この聖句は確認しましょう。今日の中心聖句として、あとから、皆で唱和する中心の聖句です。確認しましょう。

「3:16 そこでヨハネは皆に向かって言った。「私は水であなたがたにバプテスマを授けています。しかし、私よりも力のある方が来られます。私はその方の履き物のひもを解く資格もありません。その方は聖霊と火で、あなたがたにバプテスマを授けられます。」

私は、この方、すなわちキリストの靴のひもを解く、それは、当時、奴隷の役目でしたが、その値打ちさえない人間だと言い、私の言う事を守らなくても、何の罰も下らない、もしそうだったとしても、この方は、貴方たちを地獄の火に投げ込むこともされれば、聖霊によって、命をあらたにし、それはたびたび健康のことを示しますが、健康にし、病を具体的に癒すことも出来れば、いわば、具体的に、天国の免罪符を渡すことの出来るお方だというのです。

さて、今日の箇所のお話しましたが、まず、最初の、キリストを迎えるために、私たちが悔い改めなくてはならないという部分について、今一度、見ます。たとえば、このようなことが書いてあります。キリストを迎えるためにどうしたあらいいかと問う群衆にこうヨハネは言います。

「下着を二枚持っている人は、持っていない人に分けてあげなさい。食べ物を持っている人も同じようにしなさい。」(：11)どうしたらいいかと訪ねる収税人にはこう言います。

「決められた以上には、何も取り立ててはいけません。」ローマ人であったか、あるいは、神殿警護のユダヤ人の兵士か、かれらには。

「だれからも、金を力ずくで奪ったり脅し取ったりしてはいけません。自分の給料で満足しなさい。」と。イエス様が、山上の垂訓で言われた、心のあり方にまで迫り、メスをいれる内容からすれば、きわめて常識的な内容です。

私は、ここのところを読んでいて、ここで、ヨハネは、なぜ、イエス・キリストを信じよ、そうすれば罪が赦されると説かなかったのか、まだ知らなかったのかと、考えました。ただ、そう考えていて、同時に、常識的ではあるが、人が、キリストをお迎えする前に、あるいは、神の前にといい、どうあるべきかという点で、大事なことを、言っているなあとも思いました。

収税人が、決められた以上に自分の私欲のために、それ以上とることをしてはならぬと言われても、当たり前ですが、しかし、その当たり前の事を、私たちは、当たり前と、誰にも言われないのではないかということです。もちろん、今でも、不正をしてはならないことは、法律で禁止されています。しかし、相変わらず、そういう不正な事件が政治の場で、会社で、問題になるのはどうしてでしょうか。それは、誰も見ていなければ、人はやってしまうと言う現実があると言うことなのではないでしょうか。兵士も、陰では金を脅して取っていたからなのです。群衆も、貧しい人の悲しみや飢えには目をつむって、見えないふりをしていたからです。



今日の箇所は、まだ、イエス・キリストの救いまでいかないところですが、教会の役割、とりわけ、地の塩、世の光たろうと、今年の年間聖句を掲げた、豊明希望チャペルの私たちはそうだと考えさせられたのです。

先週の火曜日(10/7)に、美浜町で行われた、日本で最初の聖書翻訳に、貢献した音吉の記念会に参加してきました。美浜町の町長が挨拶し、地元の衆議院議員の奥様が挨拶し、音吉記念会の地元の86歳の会長、音吉たちが当時、乗っていた船の船長の子孫の方が出席されました。また、日本聖書協会の理事長、音吉が最後に亡くなり、墓があるシンガポールの大使館の方、シンガポールの聖書協会の会長が、ご挨拶されました。今年で、64年目の式典だそうです。

地元の会長の斎藤さんが、この音吉の縁で、



美浜町から何十人も彼が死んだシンガポールを訪れ、それ以来、美浜町とシンガポールの交流が始まっている。美浜町にとって、音吉は、世界の多くの方々と交流させてもらった。私は、音吉への感謝で涙が出てくる。音吉のこと、そのことだけで、私は生きている。そう言われました。日本に帰れるとなつて、太平洋から日本の陸



地に近づいたとき、幕府は、大砲を撃って、音吉たちが入るのを拒否しました。彼らはついに、日本に帰ることなく、シンガポールで結婚し、異国の地に骨を埋めたのです。

聖書を翻訳に力を尽くした音吉、洗礼を受けたとも記される音吉。私も、式典の後、一人で、彼のことを思いながら、美浜町の太平洋の海を見ました。大型タンカーが何そうも見えました。当時、船から悔しい思いで、日本の地を見ていた音吉のことを思いました。

美浜町の人達は、2000 年に入ってから、明らかになった、シンガポールの彼の墓から、彼の骨、灰になったそれを持ち帰り、海の遭難で死んだ 14 人の船員と共に、葬りました。お寺を訪ね、寺の裏にあった、墓に行つてまいりました。

地元のライオンズクラブの方々が、祈念碑の入口の道沿いに、こんな立て札を掲げていました。



「福澤諭吉はシンガポールで、外国の様子を音吉に尋ねた。そして、多くの除法を得た。しかし、福澤は、音吉に冷淡だった・・・音吉が、なぜシンガポールにいるのか、日本に帰れないままなのかという事情には、深く考えもせずに。当時の人達にとって、音吉など、尾張(名古屋)の船子(船乗り)という、低い身分のただの

男ほどでしかなかった。」と。美浜町の方々の悔しい思いと、同時に、音吉に対する愛を感じる立て札でした。

その後、カトリック名古屋教会の司祭の講演が 1 時間ほどありました。

神父さんは、集っていた人達の多くが、地元のプロテスタント教会の兄弟姉妹だったこともあって、カトリックの紹介のお話しをなさいました。

カトリックの歴史を、見ると、あまりにひどくて惨憺(さんたん)たる気持ちになると言われました。カトリック教会は、中世の頃、世の人々から信頼を受けて、世の人々からは、生きる指針をいつも示してきた。カトリック教会に聞かないと、物事お決めないと思ってくれた。しかし、17 世紀からの啓蒙思想の中で、世の人は、カトリック教会も、ついでにキリストも、神も疑い、世俗の思うままに生活した。その結果、世では貧富の差が激しくなった。その世の価値観は、教会の中にも入ってくるようになって、教会は、第一バチカン公会議(1869～1870)で、世の人々に門戸を閉ざし、典礼中心、教職のヒエラルキーだけにこだわり、世との接触を断った。これを変えたのは、第二バチカン公会議(1962～1965)だった。教会は、世に

門戸を開いた。その結果、外からゴミが教会の中に入ってきた。風が吹き荒れ、教会は荒れ、多くのシスターがベイルを捨て、多くの神父が神父をやめた。

先生は、カトリック、プロテスタント問わず、私たちはキリスト者として、世の人々とどう向き合うかが問われていると言われました。世に門戸を開いて、教会の中に問題も起きたが、世から逃げてはいけなと。教会は、いまだに世の模範であり、聖書の教えを伝える義務がある。世は、罪の下にある。そして、世は、生きる基準を求めていると。

キューバ危機(1962)のとき、アメリカとソ連は、核戦争前夜となった。そのとき、時のヨハネ 23 世が、ソ連のフルシチョフと、アメリカのケネディーに書簡を送った。戦争をやめるにやめられない時、フルシチョフが、教会の教皇が戦争をやめろというから、やめようと言って、危機を逃れたと。それは、自分たちには責任はないが、教会がうるさいからやめてやってもいいと、教会を口実にしたのだと。でも、クリスチャンは、そういう役目もあるのかもしれないと思うと言われたのです。

下着を二枚もっていたら、一枚はほどこせ、収税人は余計にとるな。兵士は、金をせびるな。ごく低レベルな話だけれど、ヨハネのメッセージは、たしかに、神の民の世の光、地の塩であることの意味と意義を示しているように思うのです。

さて、今日は、バプテスマのヨハネの出来事から、私たちがクリスチャンとして、世の光となり、地の塩となって働く使命がある、役割があることが自覚させられたのだと思います。

「私はどうしたらいいのでしょうか」と問う世に、解決が出来ないで、神を見上げざるを得ない人々のために、みことばを示し、イエス・キリストを指し示す役割を、地の塩、世の光の役割を少しでも果たして行けるように、今週も出ていきたいと思います。